

「教育的活動や教育的機能がそのまま教育実践というわけではない」——これは梶田（2006）<sup>1</sup>にある言葉である。

当時、梶田叡一学長の下で兵庫教育大学大学院は、教育実践学の構築という事業に挑戦をしていた。それが『教育実践学の構築』（東京書籍、2006）を生む。そこでは、教育学は「人間形成に関わる教育全般を対象として研究を進めている」が「実践が常に中心を占めているわけではない」こと、「必ずしも実践と直接的には結びつかない研究も行われる」ことが述べられ、対して教育実践学は、「実践との関係を常に中核に置きながらの研究となる」と述べられている（p.10）。

本学教育実践研究紀要は、これをそのまま後追いするものではない。しかし、梶田（2006）が「現実には、こうした教育実践についての研究（の名に値する取り組み）は、わが国において、これまで必ずしも十分に展開されてきたわけではない」と述べ、「方法論的反省のない著作物は教育分野に氾濫しているが（こうすれぼうまくいく）といったハウトゥもの、自分のやったことを単に綴っただけの実践記録、『この学校ではこうで、あの学校ではこう』といった観光ガイド的な教育活動のカタログ）、それらを集大成したとしても『教育実践学』を確立することは到底無理である」と述べていることの趣旨は、しっかりと受けとめなければならない。ここに示されていることを本学教育実践研究紀要の執筆者には強く意識してもらいたい。それは、「実践との関係」を意識の中にしっかりと置いた上で、具体的な授業をどうするのかという「やり方」だけではなく、それを支える学校と教師の哲学、本質的な問い（例えば今なら、『人間性』とは何か）『人間性の涵養』とは何か）を自問自答する「あり方」について各執筆者が自分の解を積極的に展開することであり、そのことを強く願う。

時代が「人間性の涵養」を目指すこの時期に、本学は人間教育を理念とする大学として誕生した。その研究成果の一端を示すものがこの教育実践研究紀要である。教育学が目指す人間形成、教育の目的である「人格の完成」に日本の教育がアプローチしていけるように、具体から本質的な問いへと迫る「自分解」にまで、果敢な挑戦を期待したい。

---

<sup>1</sup> 梶田叡一（2006）「教育実践学の未来のために」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築』東京書籍、pp.333-336